



今月の大槌びと

声の広報ボランティア
「そよかぜ」のみなさん

岩間眞樹子さん、伊藤英子さん
武田郁子さん、越田由美子さん
多田左衛子さん

訛りに気をつけながら読んでいます

声の広報の活動での、楽しさやご苦労など思いを聞かせて下さい。

越田さん——私は小さい頃、話すのが得意じゃなくて、今はそこまでじゃないつもりだけど、マイクを持つとやっぱり緊張しますよね。あとは標準語の発音が難しい時はあるかな…(笑)。

多田さん——毎月一回の録音に向けて、家で各自練習をしてくるんですが、普段家では大きな声で発声するなんて事はずないので、自分にとってもい事だな、と思っています。

「あの日から未来へ」
思いを持って読む企画
広報おおしでお気に入りコーナーなどありますか？

岩間さん——「大槌びと」のコーナーはいいですよ。色々な人が登場するし、若い人や、地元に戻って商売している人たちなどにもっと出てほしいと思います。

武田さん——先月は私でしたが、いつも一人で担当していますが、でも、それぞれ違う人が読んだ方が分かりやすいかも。今度からやってみましょうか。

伊藤さん——あとは、「3.11あの日から未来へ」ですね。知っている人だとなおさらですけど、読んでいると涙が出てくることもあって。でも、その人の人生や人間関係、当時の町の様子が浮かんできて、亡くなった方のためにも



とてもいい企画だと思います。いつも気持ちを入れて読んでいます。できるかぎり続けてほしいと思います。

岩間さん——今言ったコーナーのほかにも、月に一回の広報がくることで、目の不自由な方も町の様子が分かる楽しみにしてくれています。必要とされていることを実感しながら、これからも活動を続けていきたいと思っています。



7月号 吉田 研さん
8月号 「そよかぜ」のみなさん

前号と今号の大槌びとが対談するコーナーです。様々な分野で活躍する大槌びとの皆さんが、誌面の上で出会います。「たし算」ではなく、「かけ算」の絆が、また新たな大槌を創っていきます。

吉田さん(以下吉)——広報に載った後、すごく声をかけられます。買い物に行っても、職場でも。施設の利用者さんたちからもからかわれるんですけど、ある時、「載ってたね。」って言うてくれた方が、目の不自由な方なんです。何で知ってるんだ？って驚いてしまつて。

そよかぜ(以下そ)——声の広報の利用者さんかも。

吉——たぶんそうなんだと思います。インタビューの内容も全部知っていたので。今回皆さんにお会いして、謎が解けました(笑)。

そ——私たちもちろん先月号を読ませてもらいましたが、大槌に来てくれて本当にありがたいです。だいぶ慣れましたか？

吉——そうですね。方言も、最初はうまく聞き取れなかったですけど、今では分かるようになりました。

そ——方言と言えば、以前広報で方言を使って書いてあるコーナーがあつて。読むのも楽しかったですよ。

吉——面白そうですね。自分が真似して方言を使うと、「なんか違う。」とダメだしされるので。勉強になると思います。

そ——もし他にも周りの人で声の広報を利用したい人がいれば、私たちに言つて下さい。

吉——はい、私も今まで知らなかったなので、話してみようと思います。

